

名古屋栄の「蔦茂」が

グループ入り

2019（平成31）年11月11日、名古屋駅前の一等地にオープンした「ひら井名古屋」は、長良川の鮎、飛騨牛、ひら井の蟹料理を楽しんでもらうなど、岐阜の味情報発信拠点という位置づけだった。

ひら井のご主人の平井良樹さんは、ワインコレクターとしても知られており、100年前のワインもたくさん所蔵するなど、ワインを楽しむことのできる店でもあった。

味覚に加え、美濃陶器や郷土画家の絵画など、アートにも配慮した店づくりに力を入れ、大村秀章愛知県知事や大垣共立銀行の土屋嶺会長にテーブルカットをお願いした。

この「ひら井名古屋」オープンの数

デリカサイト代表取締役
FOUNDER

堀 富士夫 41



名古屋の老舗料亭「蔦茂」

新たな事業展開が可能に

カ月前、思い掛けない話が舞い込んできた。名古屋の老舗料亭「蔦茂」を経営する深田正雄さんから「デリカサイト「蔦茂」は1913（大正2）年に

トのグループ入りをしたい」との申し出があったのだ。

旅館として開業したが、名古屋大空襲で全焼し、戦後間もない頃に営業を再開した。名古屋の都心部にありながら、日本庭園のある数寄屋造りの料亭で、落ち着いた雰囲気は財界人にも広く親しまれてきたが、リーマンショック以降は客足が遠退いたため、近隣のビルを買い取り、新築同様に大改築して再出発した。

その後、経営は順調に推移していたが、深田さんには後継者がいないこともあり、将来を考えて相談を持ち掛けられたのだ。

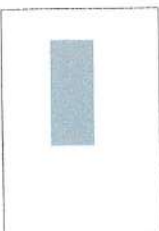
名古屋・栄の街づくりを精力的に進

めるなど、深田さんの生き方には私と共通するものがあった。岐阜の観光にも協力いただいており、県が名古屋で開催している「四水会」の会場でも何度かお会いしたことがあった。

また、「蔦茂」はJR高島屋に店を出していたり、ランドキヨスクでわざわざ餅や弁当を販売していたり、仕出し料理に力を入れているなど、デリカサイトとの相性はぴったりだった。

「蔦茂」が守り育ててきた味に、デリカサイトや水了軒が持っている保存のための品質管理技術が加われば、ケータリング事業の拡充をはじめ新たな展開が可能になると判断し、この申し出をお受けすることにした。

こうして、「ひら井名古屋」オープンの10日前である2019年11月1日、「蔦茂」のデリカサイトグループ入りを実現した。



主要ブランドが2倍に

2019年は年号が「平成」から「令和」へ転換していく年となったが、デリカサイトグループにとっても大転換のための舞台づくりともいうべき1年となった。

2月には、老舗料亭「ひら井」と伝承美濃そばの「吉照庵」を経営している「株式会社ひら井」がグループ入りした。ご主人の平井良樹さんは、伝統を活かしながらも斬新な感覚の料理を創作する優れた料理人でもある。

11月には、名古屋の老舗料亭「葛茂」がグループ入りした。総料理長の山口孝朋さんは冴えた技と感性の持ち主で、旬の素材を用いた料理は味わい深く、平成25年度の「あいちの名工」に登録された人である。



代表取締役
FOUNDER

堀 富士夫 42



大垣の老舗菓子店「槌谷」の本店

大垣の老舗「槌谷」が仲間

これに続いて12月1日、「ひら井」や「葛茂」よりもさらに長い歴史を持つ名店がグループ入りすることになった。創業が1755（宝暦5）年とい「柿羊羹」は、岐阜県特産の「堂上峰」大垣市の老舗菓子店「槌谷」である。「屋柿」の濃密な甘味に注目した四代目。

初代園助が大垣城下で創業して以

「槌谷」の和菓子はこの「柿羊羹」に代表されるように、自然に育まれてきた上品な極上の甘みを特色としている。

右助が羊羹に利用すること成功し、作り出された。毎年11月頃、きれいに色づいた柿を収穫すると、皮をひとつひとつ剥いて10日ほど天日干しにし、それを刷毛でみがいて特有の甘さの成分である果糖の白い粉りを、切磋琢磨していくところから、想像を表面に浮き出させるなど、伝統の技法によって極上の味が生み出されてい

このように、わずか1年の間に、歴史と伝統を積み重ねてきた老舗企業の3社4ブランドがグループ入りし、前年までの主要ブランドは「デリカサイト」「美濃味匠」「スイテック」「水了軒」の4ブランドだったが、これに加わり、「ひら井」「吉照庵」「葛茂」「槌谷」が加わり、一気に2倍の8ブランドになった。

さまざまな能力を持つ人たちが集まる、切磋琢磨していくところから、想像を表面に浮き出させるような素晴らしいものが生まれてくる。まさに私の夢と期待が大きくなる1年だった。



わが地域活動の遍歴

私は生まれ育った故郷だけでなく、人との縁や絆も大切にしてきた。そんな私は会社を設立した翌年の1973（昭和48）年、大垣法人会に入会した。当時の思い出で忘れられないのは、西濃運輸社長で法人会の会長であった田口利八さんの青年部会での講演である。

踏まれても踏まれても力強く花咲く「福寿草精神」についての話で、「私は繰り返し話し続けているが、本当に大切なことは、耳にたこができるくらい聞いて、ようやく分かるものだ」という説明をワクワクしながら聞いていた。

会場は当時の地域一番の料亭の大広間で、私がその後の懇談会で田口会長



代表取締役
FOUNDER

堀 富士夫 43



ウィーンのホーフブルク宮殿で行われたOKB100周年記念での土屋嶋さんと筆者（左）

の所へお酌をしに行くと、まずは名前を聞かれ、「君は一生懸命、聞いていたね。頑張れよ」とほめていただいた。

田口利八さんに触発される

この時のことに触発された私は、大垣JC、OJB大垣青年重役会、大垣ロータリークラブ、大垣専門店会（現在は協同組合わくわく西美濃）、大垣商工会議所議員というように、さまざまな活動に参加していった。

とりわけ大垣JCやOJB大垣青年重役会の活動は楽しく、朝6時から当社の新工場の会議室で「指導力研修会」を開催したり、私の提案で今も続いている「水門川万灯流し」を始めたり、元気な子どもを育てるために「西美濃つ子」教育を考えたり、新入社員の場合、同求人説明会を開催したりした。

この時のことに触発された私は、大発に力を入れた。まず豆腐屋さんの数社に集まってもらい、「芭蕉水豆腐」が完成した。この効果を飲食店へ広げていくために、飲食店数社に「芭蕉水御膳・昼餉（ひるげ）」を開発してもらい、さらに料亭やホテルへ展開していくため、「芭蕉水御膳・夕餉（ゆうげ）」の開発をお願いした。

豆腐屋さん、飲食店、料亭・ホテルに続いて、今度はお寿司屋さんに集まってもらい、豆腐をあぶらあげにして「芭蕉元禄稲荷寿司」の開発へと進展していった。寿司職人にはそれぞれの流儀があり、喧々譁々のやりとりが今でも楽しく思い出される。

この食品部長としての活動は、会議所会頭であった土屋嶋さんにいろいろ支えていただいた。



会の設立に携わる

ほかの人の誘われていくつかの会に入会したが、私自身が設立に携わった会もある。

私が結婚した1966（昭和41）年の12月、私の高校の同級生で地域の有名商家の跡取り息子たちが、家業を継ぐために学び、親交を深めようと、13人が集まった。

みな若かったので、「これからは経済力をつけたい」との思いを込め、人数の10（と）3（み）をもじって「富の会」と名づけた。私はちゃっかり、自分の名前の一文字を入れ込むことに成功した。

同級生ならではの遠慮なしの付き合いが始まり、子ども連れの海水浴や家族会イベントを開催した。国内のみならず香港や韓国にも旅行し、旅先では



代表取締役
FOUNDER

堀 富士夫 44



毎月行っている「クリーンアップ作戦」（9月25日）

バカな隠し芸を見せ合った。私はいつもお座敷芸の「ハエ取り紙音頭」を踊らされたものだ。

高校の同級生と「富の会」

75（昭和50）年、20歳年上の私の長兄が市会議員に立候補した時以来、7回の選挙で大変お世話になり、頭の下

がる思いだった。

76（昭和51）年8月には、「三水会」という集りの立ち上げに携わった。田中せんべい本店の故田中民夫さんから「大垣共立銀行の土屋斉頭取の長男である土屋嶠さんが、修行先の富士銀行から戻ってくるので、地元の人によく知ってもらうための応援の会を作りた」と相談され、私が初代会長を引き受けた。

土屋嶠さんは、名古屋支店長になられた時からひととき大きくなられ、日

サービス業」という信念のもとに、OKBを全国に名だたる銀行に躍進させたが、2020（令和2）年に逝去され、残念でならない。

ところで、本社工場のある大垣市築捨5は、国道258号沿線に位置している。名神高速大垣インターに連なる大垣の南玄関口として、交通量は増加し、スーパー、スポーツ用品、レストランなど全国チェーンの進出が進んできた。

そこで、沿線で商いをしてる5人呼び掛け、植樹や清掃活動を実施して、ここを「に（2）こ（5）や（8）か花街道」に代えようという取り組みを開始、現在53社の会員である。

02（平成14）年からは、毎月25日の午前8時に集合して「クリーンアップ作戦」を行うなど、美しい道づくりに取り組んでいる。



日本国際ポスター

美術館を開館

大垣ポスター展実行委員会は1985(昭和60)年から、地域の文化活性化とポスター芸術の理解を願って、世界のポスターを紹介してきた。

私との出会いは87(昭和62)年のことだった。金沢大学の松浦昇先生から、世界のポスター界をリードしてきたポーランドのポスターを見せられたのだ。強烈に伝わってくるものがあり、私は大変な衝撃を受けた。

ポーランドでは、66年に「第1回ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ」が開催され、68年には世界最初の「ポスター美術館」が創設された。

私はこの出会いを機に、88(昭和63)年6月に大垣で開催される「現代ポーランド大ポスター展」を手伝うことに



取締役代表
FOUNDER

堀 富士夫 45



ユネスコ無形文化遺産に登録された大垣まつりで、本美濃和紙にシルクスクリーン印刷されたポスターを展示(大垣駅通りOKBストリートで)

なった。
私は岐阜経済大学の大迫輝道学長の

街づくりの資産になる

声掛けで発足した「ポスター愛好会」にも参加した。アートへの感性に自信

があるわけではなかったが、街づくりの資産になるとの私なりの感触を得て、ポスターの世界に関わっていくことになったのだ。

91(平成3)年には単身でフィンランドのラハティへ赴き、「ポスターコレクション」を初体験、その後もヨーロッパの美術館イベントに参加した。「現代ポーランド大ポスター展」以降も、アメリカ・ソウイェト、フィンランド、新生ドイツ、チェコ、スイスのポスター展が開催され、96(平成8)年には日本初の「国際ポスター美術館」がデリカサイトビル5階にオープンした。

開設に当たっては、設立準備委員会代表の土屋斉(大垣共立銀行名誉会長)、大迫輝道(岐阜経済大学教授)、松浦昇(金沢大学教授)の3氏により、「ポスターを通じて世界平和を希望し、希望に満ちた文化都市を創造するため、この大垣の地に日本国際ポスター美術館の設立を宣言する」との宣言がなされた。

美術館の運営はボランティアだが、2017年認定NPO法人に承認された。こうすれば協賛金が経費に計上できるので、企業の協力を得やすい。また、この運動の中からデザイン関係の多くの大学人が生まれていった。その後、「国際ポスター美術館」は岐阜協立大学へ移転したが、年に数回の展覧会を企画・開催し、近代ポスターの祖ロートレックやシエラのポスターなど1万数千点を所蔵している。



大垣城を中心とする

新たな街づくり

関ヶ原の戦いから400年を記念して、2000（平成12）年3月25日から10月9日まで「決戦関ヶ原大垣博」が開催された。私は実行委員会の企画部長を拝命した。

当初は大垣城公園広場に、大河ドラマ「葵徳川三代」の放送にちなんだNHK館と東芝DVD館を設置する構想だったが、私が参加してからは、大垣城周辺広場や大垣城ホールにまで会場を広げた。

夏場の客足減対策など直面する問題に対処していったが、もっとも悩んだのは、テーマは「戦争と平和」であり、平和のイベントをどうするのかという問題だった。

そこで知ったのが、「時の蘇生」というプロジェクトだった。長崎で被爆

代表取締役
デリカサイト
FOUNDER

堀 富士夫 46



3000人の大合唱

散策・回遊性向上へ奔走

しても生き残った柿の木を平和のシンボルとして、その2世の苗木を世界各地に植樹していく取り組みだ。古くから柿の産地として知られてきた大垣にふさわしいと、多くの人が受け止めた。

こうして「OKAKAIプロジェクト」が立ち上がり、大垣城公園や東中学校で植樹がなされた。さらに「LIFE&PEACE」をテーマにしたポスター展、長崎と大垣の子どもたちのTV会議、3000人の大合唱などが繰り広げられた。

2003（平成15）年に小川敏市長が誕生した時には、私は芭蕉元禄360年事業として「芭蕉元禄事業」を提案し、2004～2005年に「まちなかイベント」が開催された。

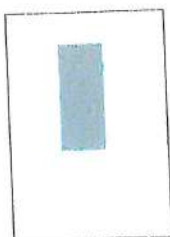
芭蕉が4回も大垣を訪れたのは、回

船問屋を営んでいた谷木因に会うためだった。三輪酒造の社長は、その木因邸跡に芭蕉関係の拠点を建設する運動をしていたが、マンション建設のため売買契約がなされてしまい、その解約のために私も奔走した。

こうした地元の努力が実り、2012（平成24）年、「奥の細道むすびの地記念館」が完成した。

大垣駅から大垣城までは700坪。水門川、大垣城、むすびの地記念館などを散策・回遊するには、その間の街なかの整備が不可欠になってくる。

そこで私が京都大学大学院で研究し、一冊の本にまとめたのが「郷土力を活かす市街地再生のまちづくり」地域再投資による「芭蕉元禄ミュージアム回廊構想」であり、2019（令和元年）には地権者51人の合意を得て、具体化に向けた「郭町東西街区市街地再開発準備組合」が発足した。



大学院で学んだことを実践

大垣まつりには270年の伝統があり、2016（平成28）年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。壮観なのは13両の華麗な軸（やま）の巡航だが、郭町の再開発では軸会館を作ったどうかと、私は考えている。

城を背景に13両が並ぶ姿は見ものではないだろうか。水の都の大垣に世界一の自噴井戸を掘り、ローマのトレビの泉と姉妹提携してはどうか、とも考えている。

ほかの人にはほかの人のアイデアがあり、思いはさまざままでいいのだが、ここで重要なのは「社会的共通資本」という考え方であり、私が62歳の時から大学院で学んできた大切な原則のひとつである。



デリカサイト代表取締役
FOUNDER

堀 富士夫 47

私は04（平成16）年から岐阜経済大 月から京都大学大学院で2年半、研究 ことである。私ととりわけ縁が深かった岐阜経済 大学（現在の岐阜協立大学）では、理 事・副理事長や校友会会長もさせてい た。

「社会的共通資本」を豊かに



京都大学の大学院に通っていたころの筆者

そのおかげで、05（平成17）年から 岐阜経済大学で非常勤講師を11年間、 09（平成21）年からは東海学院大学で も非常勤講師を務めている。

岐阜経済大学では16（平成28）から、 客員教授として教壇に立たせていただ いている。明治大学からは毎年夏に藤 江昌嗣ゼミのみなさんが来社され、そ の時も講義をしている。

滋賀大学や岐阜大学にも招かれた が、私がいつもお話しするのは「郷土 力企業が経済主体として地域内再投資 力を高め、それと両輪で市民協働（産 官学民）のまちづくりを推進してい

くことである。 私はこの大学が私学から「大垣市立 大学」になることを夢見ている。公立 大学になれば、西濃の高校生の多くは 東京や愛知の大学に進むことなく、そ のままこの地で学び、この地で就職す ることになるだろう。

西濃には10社の上場企業がある。企 業のトップから経営理念などを聞き、 インターン学習もできるので、本社採 用のチャンスはそれだけ大きくなる。

女性は母親と同居しながら大学で学 び、地元で就職すれば、子育ても母親に 協力していただけるので、出生率が高 まり、人口増加の核になると思うのだ。



失敗から学んだこと

1970（昭和45）年から食品スーパーやショッピングセンターに惣菜の店を出店していき、78（昭和53）年には念願の単独出店を果たすことができた。

大垣駅通りの郭町店、銀座街「おむすび太郎」、岐阜市中心部の徹明店の3店だった。その頃はまだまだ、中心商店街に出店するのが夢であり憧れの時代だった。

しかし、紡績工場跡地にGMSが進出し、紡績工場で働く若者の姿が消えていくと、中心街の通行量は激減していき、町中の3店を閉じることになった。当社で初の退店だった。

2000（平成12）年には総店舗数が100店に近づいたが、翌年のマイカルの破綻を契機として、その後は毎

デリカサイト代表取締役
FOUNDER

堀 富士夫 48



オープンから2カ月ほどで店じまいした「ひら井名古屋」

年、出店と退店が交互するようになり、し、「くいしん坊万才」の25店を加えて、総数は231にもなる。これまで188店と18事業が撤退

オープン2カ月で撤退も

きわめつけは「ひら井名古屋」で、コロナの影響により、オープンから2カ月ほどで撤退を余儀なくされた。世の中、何が起きるか分からないものだから、デベロッパが行き詰まるとの退店が100店ほど多く、デベロッパのテナント政策の変更で退店を迫られたケースも相当数あった。当社の独自の理由によるものは50〜60店ほどではないだろうか。

私のこれまでの60年間は、ほとんど自転車操業の人生だったが、多くの有名企業が消えていく中で、何とか生き延びることができた。

タマコシやヤナゲンはじめ、多くの

出会いに育てていただいたからであり、失敗の中にも学ぶことがあったからだ。

キッコーマンデリカサイトの経験はビュッフェスタイルに活かすことができたし、なだ方には調理技術を格段に高めていただくことができた。

売り上げはコロナ以前の80%ほどに落ち込んでいるが、この水準を食材購入の上限と定め、付加価値を付けて、お客さまに喜ばれる会社にしていきたいと思っている。

グループ入りした和菓子の「榎谷」は4万坪の果樹園で柿を育て、それを菓子にしている「半農半菓子」の老舗である。デリカサイトグループは「身土不二」の精神に基づき、地元の食材を活かした「半農半料理」の歴史を積み重ねていきたい。



微笑みの中で

1996（平成8）年2月4日、長女の真理が郡上市白鳥町でスノーボード中に転倒し、意識不明のまま帰らぬ身となった。友人や会社のみなさんに可愛がられ、青春真ただ中の26歳だった。

この直後から、マスコミ各社は真理の事故を事例に、スノボの事故率の高さや危険性を報道した。

受け入れがたいこの事実を前にして、ただ呆然とするしかない私たちは、無理矢理と分かっているが、「天が何かを教えようとしているからだ」と理解しようとした。

そして、それが何であるのかを考え、「堀真理という人間はきつと、スノボ事故防止の警鐘を鳴らすために生まれ

デリカサイト代表取締役
FOUNDER

堀 富士夫 49



微笑みの中で

堀真理スノーボードで逝く

脳外科医の立場から
スノーボードを考える（対談）

藤巻高光 東京大学医学部脳神経外科
奥寺敬 信州大学医学部脳神経外科
長野オリンピック区医師会副会
見晴彦 東京大学医学部脳神経外科
酒井秀樹 東京大学医学部脳神経外科
七かこみ出版

スノーボードの危険と楽しみ方を
伝えた書籍「微笑みの中で」

最愛の娘が帰らぬ身に

てきたのだ」という思いに至った。それが真理の天命ならば、それを補強してやろう。そう考えた私は、98（平成10）年、「微笑みの中で」堀真理スノーボードで逝く」を出版した。

この本のために、執刀していただいた日本体育協会公認スポーツドクターの鷲見靖彦先生、東京大学の藤巻高光先生、信州大学の奥寺敬先生、岐阜大学の酒井秀樹先生に對談していただいた。

た。

スノーボード事故を調査・研究している先生方で、「脳外科医の立場からスノーボードを考える」をテーマに、事故の現状や安全対策などについて語っていただいた。

この中で「スノボ特有の逆エッジという現象により、頭蓋骨骨折や急性硬膜下血腫などの重大事故が発生しており、初級者

や中級者に見られる」など、貴重な指摘がなされた。

スノーボードの危険性を伝えるだけでなく、安全に楽しんでもらうために、JABAデモンストレーターの相沢盛夫先生に「体験的スノーボード入門」について解説していただいた。

さらに真理の人生アルバムとして、生前の写真や、セイノー情報サービスの鈴木秀郎社長、上司の鳥居保徳さん（現社長）はじめ、お世話になった方々、親しくしていた方々から寄せられた心温まるお言葉を掲載した。

発刊後、多くのメディアに取り上げられ、スタジオの生放送にも出演させていただいた。その後、ヘルメット着用など装備の改善もあり、こうした事故は稀になっていったようである。ありがとう、真理。



ありがとうございます

私の好きな言葉、肝に銘じている言葉の中に「この世に起きることは、すべて『必要、必然、ベスト』であり、思いは実現する」というものがある。私はこれまで数々の失敗をしてきた。コロナ禍の今はそれを上回るショックを受けている。わが人生の中で、最大の試練にさらされているのだ。だからといって、恐れ、悲しみ、ほやき、苦しみ、悩んでいても、何の解決にもならない。ならばどうすべきか。すべては起こるべくして起きている、と考えるべきではないだろうか。「人間どもよ。そして堀富士夫よ。気づきなさい」と、天が気づきの機会を与えてくれているのだ。振り返ってみれば、これほどまでではなかったが、過去にもいろいろ困難に直面し、失敗を重ねてきた。その度

取締役代表
デリカスイト
FOUNDER

堀 富士夫 50



筆者の直筆による心を込めたお菓子ののし紙

に気づくことがあり、新たな道を模索して歩んできた。今回もその原則は変わらないだろう

宝物で魔法のような言葉

う。大切なのは、この試練から何を学び、これから何がしたいのか、どこへ向かって歩んでいくべきかをよく考え

るのだ。強い思いがひとつの形に結実していけば、次への一步を踏み出すことができる。そして、それが実現し、自分の願いを達成できた時、私はどんな言葉を発するだろうか。それはきつと「ありがとうございます」という言葉だ。願いを達成できたのは、周りのみんなの支えがあつてのことだからだ。だから、私はこの「ありがとうございます」の心を忘れないようにしている。朝、起床して妻と顔が合うと「ありがとうございます」といいます。おはようございますとあいさつする。すると妻も「あ

りがよいございます。おはようございます」と返してくれる。

会社に出社すれば、会う人ごとに「ありがとうございます。おはようございます」ありがとうございます。おはようございます。いらっしやいませ」「ありがとうございます。お疲れさまです」とあいさつし、1日100回ほど「ありがとうございます」といいます。を繰り返す声にする。この「ありがとうございます」は、おそらくは魔法の言葉であり、宝物のような言葉であり、この言葉のおかげで、私はここまで倒れずにやって来ることができたのかもしれない。私の「マイウェイ」は今回で最終回。お付き合いいただき、ありがとうございます。(おわり)

11月1日からは、岐阜プラスチック工業代表取締役会長の大松利幸氏です。